

酪農経営関係ヒアリング御協力者の概要

株式会社 clover farm 代表 ^{あおぬま あきら} 青沼 光

- ・ 所在地 富山県高岡市
- ・ 設立年 2015 年 2 月 (2024 年 1 月法人化)
- ・ 労働人数 5 人 (うち従業員 1 人)
- ・ 飼養頭数 160 頭 (うち経産牛 110 頭)
- ・ 生乳生産量 577 トン/年 (平均個体乳量 約 26 kg/日)
- ・ 搾乳形態 アブレストパーラー
- ・ ICT 機器の活用 無
- ・ 外部支援組織等の活用 有 (TMRセンター、酪農ヘルパー)
- ・ 平均除籍産次 3.0 産
- ・ 経営面積 (ha)

採草地	放牧地	青刈り とうもろこし
4.5	0.6	-

(トン)

年間給餌量の内訳		粗飼料	濃厚飼料
自給飼料	飼料用米	-	25
	ロール (藁)	180 ロール (100 cm)	-
	永年草種	R6 年播種予定 (約 5ha)	-
購入飼料	輸入乾草	103	-
	配合飼料	-	59.5
	県産ロール (牧草・WCS)	102 ロール (150 cm)	-
	ウイスキー粕	-	39
	酒粕	-	20
	野菜屑等	未計量	
	TMR	547.5	

・ 経営の特色等

① 農商工連携

市街地近郊の立地を活かし、地域事業者へ生乳の販売(ジェラート・パン等)を行う他、イベントへの協力等

② 酪農教育ファーム認証牧場

個人や団体の酪農体験受け入れや、学校等への出前授業などを実施

③ 資源循環型社会の形成

エコフィードの利用、堆肥を近隣の農地へ還元。今後は下水汚泥の肥料利用や耕畜連携を含む地域産飼料の増産を検討

・ その他

富山県乳牛協会会長、地域交流牧場全国連絡会理事、富山県農政審議会委員等

2017 年 毎日農業記録賞 新規就農大賞

2018 年 全農酪農経営体験発表 優秀賞 特別賞

2019 年 全国青年農業者会議プロジェクト発表 農林水産省経営局長賞

2021 年 元気とやま農林水産奨励賞受賞 農業部門

2024 年 JA 全国青年大会 意見発表 優秀賞 等

飼料生産に向けた取り組み

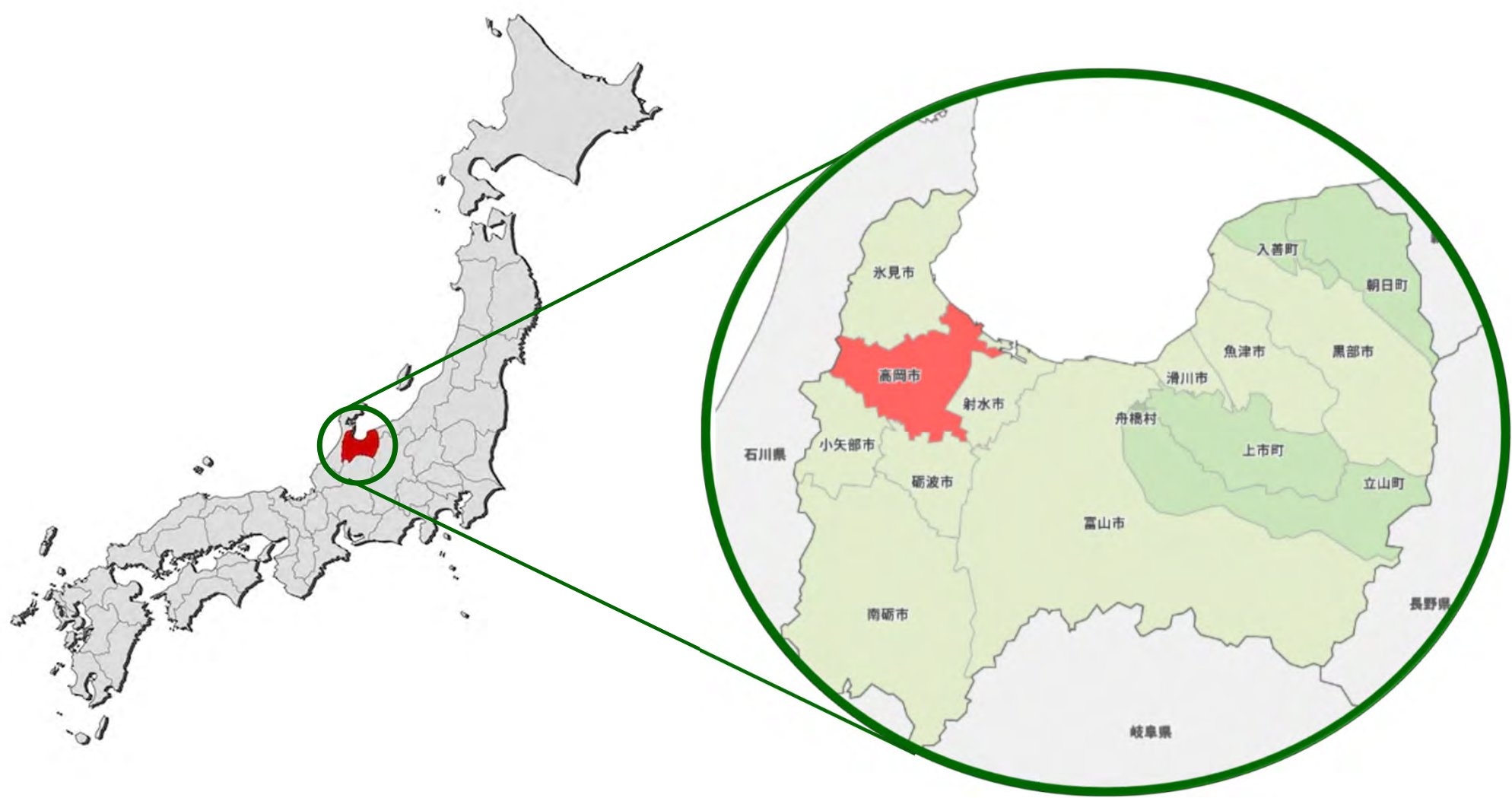
富山県高岡市

株式会社clover farm

代表取締役 青沼 光

株式会社clover farm

富山県高岡市の位置



HAPPY DAIRY COWS
clover farm

Since 2015

- 所在地：富山県高岡市佐加野東
- 労働力5人（目標6名）
- 経産牛100頭
- 育成牛60頭
- 出荷乳量 400t/年（目標1,168t）
- エコフィード等の地域資源活用
- 酪農教育ファーム認証牧場
- 都市近郊型/農商工連携





青沼 光
Aonuma
Akira

- 1986年広島県生まれ
- 新潟大学農学部農業生産科学科卒
- 中沢牧場(長野) -2年
- くろへ牧場まきばの風
- (旧新川育成牧場)-4年
- clover farm起業(2015)

-
- 富山県乳牛協会 会長
 - 富山県青年農業者協議会 事務局長
 - 地域交流牧場全国連絡会 理事 兼
北陸ブロック会長など...

クローバーファーム：新規就農時の設備投資



第三者継承による新規就農

【牛舎の整備】

- 牛舎改築
つなぎ牛舎⇒フリーバーン
- ミルキングパーラー設備
- 牛舎増築

【増頭】

- 廃用牛の活用・再生

青年等就農資金

青年就農給付金 等の活用

クローバーファーム：規模拡大（新畜舎、堆肥舎導入）



2023年春

- ・新畜舎・堆肥舎導入
- ・飼料生産用の作業機械の導入

※畜産クラスター事業活用

クローバーファームの取組み

クローバーファーム：資源循環・地域との連携①

① 耕種農家との連携 (飼料用米・稲わら回収)



② エコフィードの活用



③ 水田放牧



④ 国吉地区への 飼料作物生産の提案



【自給飼料生産/地域産飼料の利用について】

- 開業時作業機の引継ぎは一切なし
- 開業資金的にも機械の導入は困難
- 飼料生産の文化が無く、協力を仰ぐも進展せず



【飼料用米】

- 2戸の水田農家と契約
- R5年/約24トン購入（22年産ベース）
- 破碎玄米を濃厚飼料として給餌
- 水田農家が破碎機と倉庫を持っており、破碎と保管を担う

【エコフィード利用の模索】

【水田放牧】

エコフィードの活用



- 酒粕やビール粕、ウイスキー粕、おからや野菜くずなどの食品残渣を飼料として活用
- これらの食品残渣が大量に供給される時期には、1頭当たり飼料費を全購入の場合に比べて半額程度に削減できる

水田放牧



【方法】

- 牧場の目の前の水田で放牧（約60a）
- 混合放牧：除草剤や機械を使わずに管理
- 通年で放牧を実施
※夏場は夜間放牧をベースに日差し・気温が優しい時には午前中も放牧

【効果】

- 牛が日光を浴び運動でき、足腰が鍛えられる
⇒病気や事故など健康上のトラブルが減る
- ※家畜共済の医療費は同規模の経営に比べて1/3程度に抑制できている
- 畜舎での糞尿処理作業の負担軽減
- 地域住民へ牛がいる景観の提供

【課題】

- 冬季間等の泥濘化対策・放牧面積の確保



① 耕種農家との連携

【稲わら回収】

- ・ 酪農家が回収と運搬・保管
- ・ 1ロール1000円耕種農家へ支払う

【堆肥提供】

- ・ もみ殻牛糞堆肥を還元
- ⇒ 水田からのメタン発生減
+ 保肥力Up

② 地域計画

【粗飼料生産】＝牧草類

- ・ 水路の老朽化、畦畔除草困難エリア
- ⇒ 江さらい-水管理-除草作業の労力減

【高収量飼料作物】＝各種WCS

- ・ 獣害の無い平場で減反面積

③ TMR工場誘致

【飼料の製造】

- ・ 地域産飼料を買取利用

【飼料の流通】

- ・ 地域内消費以上分を地域外流通
- ⇒ 飼料生産が困難な地域へ

④ 第二、第三牧場の計画

【拠点集中ではなく分散】

- ・ 耕畜連携が行いやすい

【中山間放牧型も視野】

- ・ 山林の保全や獣害対策
- ・ 省力化、ロボット搾乳牛舎

食料安全保障の基本は資源の確保

私たちの生産活動や消費活動を見つめ直し、
生活のなかの資源のロスや吹き溜まりを見つけ出し解消していく

多様性の集約化

□HAPPY DAIRY COWS

- 牛が人に必要とされる
- 酪農家だからこそできる社会解決

□多様な農業が存在し、連携する

- 個別では解決が難しい課題も連携することで問題を軽減

□サプライチェーンの短鎖化

□地域食材の多様化

都市と農村が共存する 循環システム

